

中江要介氏インタビュー

1996年2月22日（木）

村田 最初に、先生のご経歴を確認させていただきたいのですが、昭和46年にアジア局の参事官でいらっしゃいますか。

中江 そうですね。その前は、フランス大使館の参事官で、ユネスコ常駐代表です。

村田 それから本省のアジア局にお戻りになって、昭和49年に局の次長、1年後の50年に局長、53年にユーゴ大使にご転出まで局長ということですね。つまり、46年から53年まではアジア局の中樞でずっと政策にかかわっていらっしゃったということですね。

中江 そういふことです。

村田 昭和59年6月から62年10月のご退官までが中国大使でございますね。外務省のキャリアの方々に、仮に中国専門家とか中国派があるとすれば、先生は最初の語学研修の段階で中国語でいらっしゃったわけですか。

中江 いや、全然そうじゃない。私は、中国派でも、中国語を勉強したわけでも全くなくて、経歴でおわかりのように、フランス語で試験を受けて、最初の在勤地はパリだったんです。最初のパリとユネスコ常駐代表と、フランスには2度勤務している。ですから、どちらかというとならフランスサービスの系統だったんです。

ちょうどテト攻勢の1967年から1969年あたりにベトナムに在勤して、その後、どこに行くのかと思ったら、アジア局に呼び戻された。わからないですけども、それはどうもベトナムに在勤したということがあるからだったんじゃないかと思うんです。アジア局に戻ったのが中国とのかかわりの始まりです。

アジア局7年の間に、代表権問題もひっくり返って、日中正常化があって、日中平和友好条約締結までずっとやったのが1つの材料になって中国大使になったわけですから、中国大使になったのは全くバイチャンスであって、私自身の最初からの経歴とは余り縁がない。中国専門家でもなければ、中国語のサービスでもないんです。

村田 関連して、人事のことでまとめてお尋ねいたしますと、参事官でアジア局にお戻りになりましたときは、アジア局長はどなたでしょうか。

中江 須之部量三さんがアジア局長です。その後が吉田健三アジア局長。これは割合短くて、その次は高島アジア局長、それで私になったわけです。

村田 中国大使の先生の前任者はどなたでいらっしゃいますか。

中江 鹿取大使。後でソ連大使をやってやめられました。

村田 先生の後が橋本大使ですか。

中江 私のすぐ後は最高裁判事になった中島敏次郎、それから橋本です。

村田 いまお名前が出た、その前後で中国大使におなりになっている方も、必ずしも中国スクールというわけではない。橋本先生はそうなんでしょうけれども。

中江 あれも英語で入っている人で、たまたま中国課長をやったというだけです。中国語で最初から中国専門で入ったのは、初代の小川大使。2代目の佐藤さんは、私と一緒にフランス語、3代目の吉田健三さんは、中国の留学生で、中国語をやった人です。その次の鹿取さんはドイツ語の人ですね。私はフランス語で、次の中島君は英語、橋本君も英語ということで、中国語で中国を目指して入ってきた人は、その後はまだ大使にはなっていませんね。これからそういうのが出てきますよ。

添谷 参事官におなりになったのは1971年ですが、これはいわゆるニクソン・ショックの直後ですか。

中江 直後です。正式の帰朝命令は出ていなかったかもしれぬけれども、まだパリに居る間に内示を受けて、アジア局に戻るということを知らされて、ぼつぼつ本国に帰る準備をしなければいけないなと思っていた7月15日でしたか、パリで最初にニクソン・ショックのことを聞いて、これは世の中おもしろくなかったなと思って、それから帰ってきたんです。

添谷 直後とおっしゃいますと、7月ですか。それとも8月ですか。

中江 帰ったのは7月だったですね。7月にニクソン・ショックを聞いて、あのときたしか南ベトナムの元外務大臣だった人とパリで昼飯を食べていまして、いろんなベトナムの話なんかしていたら、ニクソン・ショックで、ニクソンが中国を訪問することになったようだ、これでベトナムの問題は解決するよという話をしたのを覚えています。

それで帰ってきて、私は、中国とか、ベトナムとか、そういう問題をやるのかと思ったら、帰ってきて最初に出張した先はモンゴルだった。これは非常におもしろかったですけれども、それで日本とモンゴルの国交正常化の話が始まって、中国よりも先にモンゴルとの正常化が行われた。そのことを多くの方は知らないんです。ですから、モンゴルの初代大使が日本に来たときに、自分たちは中国よりも先に正常化しているのに、扱いが余りよくないというので、多少不満を漏らしていたことを覚えています。(笑)そういう時間的な関係があったと思います。

添谷 モンゴルとの国交正常化も、ニクソン・ショックの影響と考えてよろしいですか。それとも、これはその前から進んでいたのですか。

中江 どうでしょう。それはわかりません。ただ、ニクソン・ショックの前から、モンゴル側からは相当サインはあったんです。我が方は、それに余り好意的にこたえていなかったんですけれども、ニクソン・ショックもあって、アジア情勢がこれから変わるということで、それじゃ向こうのサインを受けようかということになって、これはまだ国交がないわけですから、親善ミッションの一員という形にカモフラージュして、私がウランバートルに行って、モンゴル側の真意を打診するということから始まったんです。そのときは、表向きは親善ミッションだったんですけれども、本当は、モンゴルの正常化のサインの中身はどんなものかを打診してくるということだったんです。

添谷 その際に、対中政策あるいは対米政策上の考慮というものは特別なかったですか。

中江 日本側ではなかったです。考慮というよりも、我々がモンゴル側の真意としてどうしても確かめたかったのは、モンゴルは、日本は対米一辺倒で、アメリカの子分みたいなもので、日本の外交は独自性がないということのをそれまでずっといい続けていたので、もしモンゴルが引き続きそんな考えを持っているなら、とても正常化する気持ちはないけれども、おまえたちの日本に対する見方が公正なものになっているのだったら応じてもいい、その1つの目安として、その年の国連総会で、モンゴル代表が日本の対米政策を非難するようなことをやめるなら考えてもいいよというサインを私は残して帰ってきました。

そして、国連総会の演説を見たら、当時外務次官だったリンチンの演説の中から対日批判が消えた。これは本物だということで、急遽正常化した。その辺のことは、読売から出ている『らしくない大使のお話』という私の本に書いてあります。その中に、国交正常化にまつわる裏話みたいなものが幾つかあって、その中にモンゴルとの話も書いてあります。

添谷 中国は別に何もいってこなかったですか。

中江 中国とモンゴルはまだよくないころですけれども、別に何もいってこないですよ。

添谷 アジア局にお戻りになったときのニクソン・ショックの後遺症といいますか、省内の雰囲気はどうでしたか。

中江 これはすごかったですよ。もうこうなったら日中正常化すべきだという強い意見と、あんな共産主義の国と正常化なんて急ぐべきじゃないという意見が、大げさにいえば対立していたような感じですね。アジア局は、当然のことですけれども、日中正常化しなきゃ

ならぬという考え方で、アメリカ局とか国連局は、そう簡単に正常化なんかすべきでない、今の台湾ですけれども、それまで友好的な関係にあった中華民国との関係を袖にするわけにいかぬじゃないかという消極論と対立しまして、当時の法眼外務次官はそれまでタカ派でしたから、法眼次官は絶対台湾を捨てるようなことをするはずがないというので、省内の消極派も大丈夫だぐらいに思っていたかもしれません。ところが、法眼さんが180度考えを改めて、「君子豹変するんだ」といって、豹変しちゃったんです。それでバーッと正常化に大きくなびいたわけです。

次官が、そこで豹変された理由はいろいろあるでしょう。法眼さんは、今インタビューのできないような状況になっておられますけれども、世の中の流れはこれで変わったと見て取られたんだと思いますね。むだな抵抗をしてもだめだということじゃないでしょうか。

それで一番がっかりしたというか、むしろ怒ったのは台湾擁護派の政治家たちで、今まで法眼次官を頼みにしていた。外務省には法眼がいるから、台湾は大丈夫だといっていたのに、法眼さんが豹変したものだから、「今まであなたのいうとおり我々はやってきたのに、あなたが変わられたら困るじゃないか」と、もう亡くなったタカ派の国会議員の玉置和郎さんなんか大分文句をいっていました。

ニクソンが中国に行くということで、アメリカの対中政策が変わりそうだというだけではなくて、国連代表権の問題が非常に大きな目安になって、当時、大平外務大臣が「中共が国連に祝福されて迎え入れられるようになったら、日本も対中政策を変えてもいい」といつもいっておられた。日本も、3本柱の1つとして国連中心主義といっていたわけですから、国連の中で台湾が議席を失って中共が議席を持つようになったら、対中政策を変えなきゃいかぬ、こういうふうに論理的に結びつけることによって、日本国内の反中勢力の反対意見を抑えようというお考えもあったのじゃないかと思います。大平さんが期待したように、あのときは圧倒的多数で中共が国連の議席を手に入れた。これで変更しない手はないじゃないかというわけで、ああいうふうに正常化に弾みがついたんだろうと思います。添谷 そうしますと、中国の国連加盟以降、先ほどおっしゃった外務省内部の対立も解消していった。

中江 そうですね。反対する連中は引き続き反対だったかもしれないけれども、事実上、力を失っていきましたね。国連代表権の問題はすごく大きな要素だったと思います。

添谷 先ほど台湾のことを理由におっしゃいましたが、ニクソン・ショック以降、中国と急ぐべきではないとおっしゃっていた方々のアメリカに対する反発とか、そういう

ものはなかったですか。

中江 アメリカが我々を無視して中共になびいてということは聞いたことないですね。日本の政治家は、押しなべて、アメリカに対して文句をいうような勇気のある人はいなかったですね。

添谷 外務省内部でも……。

中江 外務省の中では、これは有名な言葉ですけれども、アメリカはいつまでも台湾、台湾でいくわけにいくまい、いずれは中共承認に踏み切るのじゃないかと、朝海大使のころからいっていた。心ある人はそれを考えるのは当然だと思うんです。それを考えないほど非現実的な人はいない。

中共革命直後は、まだ安定するかどうかもわからぬし、反革命があるかもしれないということをもみんな考えたかもしれないけれども、見ていると、中国の革命は本物だ、中国大陆については逆戻りできないということがだんだんわかって、ヨーロッパでも、イギリスやフランスが早くから承認したわけですけれども、承認する国がふえることはあっても、減ることはないし、大陸の共産党支配もどんどん固まっていくとなると、アメリカも当然いつかは方向転換するだろう。他方、台湾がいるから、アメリカもそう簡単にはできまいが、やるとなったら、もたもたしないでバーッと転換するかもしれぬというのが朝海大使の悪夢だったわけです。その悪夢の1つみたいなものが、キッシンジャーの北京訪問だったと思います。

村田 ニクソンの訪中が発表されてから、外務省の中では、北米局に対する批判は随分出たんでしょうか。

中江 いや、それは余り聞かなかった。私の体験に関する限り、北米局に対する批判は聞いたことがないですね。むしろ国連局が、中国の代表権問題は大丈夫だ、まだまだ台湾でいけるんだと、最後まで票決を読み誤ったんですね。前日まで、台湾は勝てるということを書いていたんですよ。それで、国連局は何を考えていたんだという批判は、後で割合ありました。

村田 これは、元の外務省の関係者の方に前にお話を伺ったときに出たのですが、日中の正常化、あるいは米中の頭越しの正常化、接近のお話を伺ったときに、アジア局が日中国交推進で、北米局が保守的だったというふうな理解でお話を申し上げたら、その方は、外務省は縦割り行政になっているから、日中に関してはアジア局の専管事項で、北米局はアメリカのことをやっていけばいいので、むしろ日中国交正常化に強く反対してきたのは、

特定のエリアを担当していない情報企画部なんかはずっと抵抗していたということをおっしゃったのですが、そういう印象はお持ちではございませんか。

中江 僕は余り持たなかったですね。僕が帰ったときはニクソン・ショック直後ですから、本当をいえば一応勝負があったんですね。いよいよアジア局に帰るぞという内示を受けたときに、東京からパリにやってくる連中が「中江さん、アジア局なんかに帰ったら大変ですよ。今、外務省の中が割れてこんなになっていますよ」とワァワァいっていた。僕はユネスコでのんびり仕事をやっていたから、何をやっているのかなという程度だったんですけども、帰ったときは、ニクソン・ショックで、大きな流れがこうなっていましたから、それ以前のところはどうか、余りよく知らないんですよ。私は少なくとも、今おっしゃった調査部とか情報部のようなところで消極論があったというのは聞いたことないですね。

添谷 具体的に正常化を練っていくときに、省内に小グループができたということが知られていますね。吉田局長、橋本課長、高島局長、栗山課長の4人のグループは、中核的な役割を果たしたんですか。

中江 僕はどちらかという台湾工作をやっていたから、北京の方は余りよく知りませんが、アジア局長、条約局長、条約課長、中国課長だから、それはそれぞれ役柄は当然の人たちでしょう。別に小グループをつくってどうというのじゃなくて、むしろ日中正常化を推進すべしという人たちが、余りそれを派手にやると、反対の人、あるいは快く思っていない人たちを刺激するから、粛々と進めた方がいいじゃないかということで、余り派手にやらなかったのが、むしろ逆に疑心暗鬼を呼び起こして、自分たちで勝手なことをやるんじゃないかという反応は、ひょっとしたらあったかもしれません。

私はそのときは、吉田アジア局長の指示で、「台湾の方を頼むぞ」といわれて、日中正常化の結果、台湾がどういうリアクションを示すか、それに対して日本はどういう手を打たなければいけないか、また、台湾の反応を最小限度にとどめるためにはどうすればいいか、台湾工作の方をやっていました。

添谷 竹入公明党委員長が7月に中国の草案を持ってきましたね。あれはごらんになりましたか。

中江 いや、見てません。

添谷 あれはごく一部の人が……。

中江 あれは橋本君あたりが見ているんじゃないですか。

添谷 あれに関しては、記憶に残っていらっしやることは特別なですか。

中江 僕は、後の日中条約のときもそうですけれども、自分の性格からして、正当なチャンネル以外の雑音は余り考えない主義ですから、どんな偉い人であろうと、横でごちゃごちゃいうのは全部雑音だと思って無視して、正式なチャンネルの相手の発言とか提案だけを真剣に考えていこうということでやっていました。

添谷 ぜひ台湾のお話をお聞きしたいのですけれども、結局、最後まで台湾は日本に対していい返事をしないわけですね。日本の台湾対策は、どういったところに注意なさって、どの辺がポイントだったんですか。

中江 一口でいえばメンツでしょうね。台湾の人といえども、それこそばかじゃないから、抵抗しても、この潮の流れを引き返すことはできないということはわかっているわけです。わかっているけれども、そうかといって、「はい、はい」というわけにいかない。何とか反対したいけれども、反対できない。結局押し切られるけれども、ただへなへなとしてしまうのでは、メンツも立たない。自分たちのメンツが保たれた上で、流れが向こうに行くならやむを得ない。いかに彼らのメンツを保っていくかということがポイントだったと思います。

添谷 そのメンツを保つために、日本側としてはどういうことをしたのですか。

中江 台湾交渉の話は、KKベストセラーズから出ている『中国の行方』という本に割合詳しく書いてありますが、椎名副総裁が台湾に行かれた。最初にだれか特使を出すといって、椎名さんが行くことになったときに、台湾側は、台湾に既成事実を押しつけに来る、「うちは北京とやりますから、あしからず」ということをいいに来るなら必要ない、また、「まことにやむを得ない」といって、ごちゃごちゃ釈明しに来る特使も必要ない、田中・大平のラインで日中正常化をして、台湾を切り捨てることと決まったものを、今さら特使を出してこなくてもいいじゃないか、これが台湾の表向きの反発だったんですね。ところが、それと同時に、そういう大物特使を派遣してくる日本の気持ちを逆手にとってといったらあれだけでも、台湾にとってメンツを保つような形にそれを利用できないかということもあわせて考えていたに違いない。

椎名さんが、「子供の使いじゃあるまいし、私が行って、どういうことを向こうにいうのか、はっきりしなきゃ私は行くわけにいかぬ」といって、大分文句をいわれたんですけ



れども、田中角栄は最後まで何もいわない。「あんたが行ってくれば決まるんだから、とにかく行ってください」というだけです。それで、椎名さんは非常にご不満だったんですけれども、しょうがないというのでいらした。台湾の方は、椎名さんのような方が見えるなら、椎名さんのメンツも損なうわけにいかないというので、それも配慮した。

あの辺は、非常におもしろいアジア的な解決の仕方だったと思うんです。どこがアジア的かという、結局よくわからぬわけですよ。椎名さんが何をいって、台湾はそれで納得したとか、納得しないとか、さっぱりわからないんですけれども、何か両方でごちゃごちゃいって、非常にうまい結果を出した。

それはどういうことかという、日中正常化をやるのは、田中、大平という一握りの政府首脳が間違っただけで、日本人一般大衆は、引き続き台湾に対して好意的、友好的な気持ちを持っているということを台湾の人はよく知っているし、それを信じるということ、そのときの声明の最後に入れたわけですね。「日本国民は、引き続き台湾に対して友好的な気持ちを持っていることを信ずる」というワンパラグラフが入るか入らないかが、一番のポイントだったと思うんです。それが国民政府の声明の最後に入ったことによって、日中正常化が日台関係に大きな障害になることを防いだ。

具体的にいえば、台湾海峡を通るタンカーを撃沈するとか、台湾にある日本人の財産を全部没収するとか、台湾にいる日本人を拘束して日本に送り返すとか、そういう報復的なたぐいのことは一切やらない。それは、日本国民はまだ我々を愛しているからで、悪いのは田中一派だけだということです。これは、日中正常化のときの賠償のあれとよく似ているんですね。

村田 椎名特使がいらっしゃるときに、田中総理から明確なガイダンスみたいなものがなかったというお話ですが、「椎名先生、こうおっしゃってください」みたいなことは、外務省サイドからはあったんでしょうか。

中江 いや、それはないです。それは最高レベルの政治的な問題だから、事務当局がとやかくいうところはない。

村田 「日本国民は信ずる」という最後のパラグラフは、椎名さんと蔣経国、その辺で政治的に入れたわけですか。

中江 そんな具体的な話は、椎名、蔣経国とも出ないんですよ。そこがおもしろいところだと思うんです。おまえのところでこういうふうにいってくれば助かるとか、そんなレベルの話はしない。椎名さんも蔣経国も偉いんです。何も具体的なことなしで、日本の状

況はこうなっています、蔣経国は、台湾はこう思っている、共産主義が台湾、中国大陸に根づくことは絶対ない、必ず失敗します、そういう話で、どうなるかわからない。けれども、そこから日本国民を敵視するのじゃなくて、田中一派を敵視するという使い分けをするという発想は、戦争責任の問題で、一握りの軍国主義者が悪い、日本人民は中国人民と同じように戦争の犠牲者だといって賠償を要求しなかった大陸側と同じ発想ですね。やっぱり中国人の発想なんです。

村田 それは台湾外務省が入れたんですか。

中江 もちろんそうです。こっちから、こういうのがいいなんていうことは絶対ない。

これは1つの示唆に富む話だと僕はいつも思うんですけども、日中関係、あるいは日台関係でも、問題がこじれたときに、上手な収拾策というか知恵は中国人から出るんです。日本人からは出ない。日本人はそういう知恵を出す能力もないし、才覚もない。要するに視野が狭いんですよ。中国人の方が、台湾であれ、北京であれ、上手な解決策を出す。これは、商売の話のときもそうだし、平和友好条約交渉のとき、航空協定のときもそうだし、いろんな政府間のレベルでもそうですが、最後は中国からいい妥協案が出る。それは本当に僕はすごいと思うんですけども、日本人は心が狭いからだめなんです。日本人は思い詰める。思い詰めた人間はカーッととなっているから、心の余裕がなくて、こういう解決でいけば両方ともうまくいくじゃないかとか、ほんわかとした余裕をなくしている。その一番いい例が、今いった台湾の問題と中国の戦争責任の問題だと思うんです。

添谷 台湾との関係でもう1つお聞きしたいのは、大使が台湾とコンタクトしているときに、日米安全保障条約の話とか、いわゆる極東の範囲の問題、そういったものは台湾側からの懸念は出てこなかったですか。

中江 ないです。不思議なことに、日米安保とか、日米関係とか、極東の安全保障とか、そういったたぐいの話は一切なかった。

添谷 それは外務省レベルのお話の中にも出てこなかったですか。

中江 その中にもない。それは何を意味しているかという、日中正常化というのは、いわゆるソフィスティケートされたバックグラウンドの上でなされたものではないですよ。実に恥ずかしい動機なんです。

恥ずかしい動機というのは何かというと、日本の中で、「日中正常化をやれ」という声 that ワァーッと上がってきたわけでしょう。一握りが「台湾、台湾」といっているけれども、特に財界、経済界は、日本がいつまでも日中正常化しないで、あの大きな市場をみすみす

ヨーロッパなんかに取りられるのはだめじゃないかということで、特に経済関係を早く正常化しなきゃならぬという圧力が日に日に強くなって、国連で形勢が悪くなってくると、ますますそうなってきた。

大げさにいえば、国民世論に抗し切れないで踏み切るといっただけの話で、それによって日米安保がどうなるか、日本の安全保障がどうなるか、極東の安定と繁栄のためにそれがいいか悪いかなんて、後でとってつけた議論としてはみんな知っているんですけども、それを実際に動かす人、特に田中角栄の頭の中には1つもなかったでしょう。あの人は、総裁選挙の公約の中に「日中正常化」と入れて当選したから、日中正常化をやらざるを得なくなってやったということだと僕は思うんです。哲学がない。もし哲学があったとすれば、大平さんにあったんですね。大平正芳という人は、不思議なくらいに、中国を大事にせにゃいかぬという信念を一貫して持っていた。田中角栄は、大筋は日中正常化をやる、「ごちゃごちゃ理屈いうのは君たちやりたまえ」といって、大平正芳に任せたということでしょうね。

大平さんは、1つの哲学、理念があったと思うんです。だけど、それは大平個人の問題で、田中内閣そのものに何かあったかということ、「そんなものはない」といったらしかられるけれども、(笑) 本当に僕はないと思う。

添谷 中国と正常化をする際に、中国が日米安保に関して何をいつてくるかということに関する心配、懸念はなかったですか。

中江 それは、その前に勝負がついていたように思うな。中国はその前に、日米安保は必要だというようなことを既にいつていたんじゃないですか。

村田 安保廃棄は入り口ではなくて出口であるというようなことを、愛知さんが行ったときいつたんですか。

中江 僕はちょっと記憶がはっきりしないんです。

添谷 竹入さんが中国の草案を持ち帰ったときには、日米安保への言及が全くなかったということで、胸をなでおろしたというような話は聞いています。

中江 日米安保が日中正常化の妨げになるとか、邪魔になるというような発想は全くなかったところから見ると、その前にどこかで勝負があったんじゃないかな。中国はむしろ日米安保は必要だといつたけれども、<sup>ごげんしゅう?</sup> がついたように、「日本はもっとしっかり軍備をやれ。日米安保で頑張れ。それでないとソ連にやられるぞ」ということをいう段階がやがて来るんです。

中国は、ローカルな視点から見ると、対ソ政策の方がずっと大事です。対ソ政策上、アメリカも必要だし、日本も必要だという発想に立っている。それを、ああじゃないか、こうじゃないかと取り越し苦労して心配する日本の方が、全くグローバルじゃないということだったと思いますね。

添谷 台湾との接触の中で、当時、アメリカと台湾がどんな話をしていたか、どういうコンタクトがあったかということは何かわかりますか。

中江 全然わからない。アメリカの方をどうするんですかとか、そんな話は全くなかったですね。なぜないかというと、その話に触れても、余りにもデリケートで、本当の話は聞けないということでしょう。椎名さんという人は、小さいことにこだわらない「省事」がモットーで、大事なことは、台湾の日本に対する信頼感を根こそぎだめにしては、日本にとってよくないということだけのことでしょう。椎名さんは勝手に自分で考えて、いろんな話をされましたけれども、何を話そうといいんですよ。椎名さんという人が台湾にやってきて、何か知らぬけれども、蔣経国とごちゃごちゃ話して帰った。それで台湾はいいんです。そういう受けとめ方だったと私は受けとめています。

村田 読売新聞のワシントン支局が、72年1月の佐藤・ニクソン会談で中国問題についてやりとりがされている内容のアメリカ政府の解禁文書を入手したというので、おととい(96.2.20)の新聞にそれが部分的に出ているんです。これを読みましたら、ニクソンの方がむしろ、アメリカと日本が台中関係改善のために競争しても仕方がないといっている。アメリカの方が先に頭越して行くんですけれども、そうすると、日本が国交正常化の方に動くものだから、日米が競争し合っても仕方がない、緊密に協力しなければいけないというので、むしろ日本側の国交正常化へ向けての動きを牽制するような会談内容が出ているんです。これは72年の1月ですが、先生がアジア局にお戻りになって、アメリカ側が牽制しているという印象はありませんでしたか。

中江 1つは、先ほどだれかいったように縦割りで、アメリカ局はそれに非常に興味を持って、いろいろいっていたかもしれないけれども、アジア局でそれをシリアスに取り上げていたという印象は私はないんですね。局長レベルではあったかもしれませんが、私は帰ってきてまだすぐで、台湾の方をやってたし、佐藤・ニクソンで一応アメリカのお墨つきがもらえたので、日本も安心して正常化できたということが、よく書かれたりいわれたりしていますけれども、私はそのところは全然知りません。

僕個人としては、そんなことと関係なしに、田中角栄としては、国内政治上、とにかく

日中を正常化しなきゃならぬところに追い詰められていて、あとはいかに正常化するかということだけだった。細かい字面合わせは、竹入だの、古井喜実さんだの、いろんな人がごちゃごちゃやったけれども、中国の方はもう用意ができています。大筋はもう決まっていたので、一番大事なことは、結果として台湾との間でとんでもないことが起きると困ることだった。だから、大平さんは、日中問題はすなわち日台問題だということを年中いっておられた。私は、この判断は正しかったと思うんです。

日中正常化の方は、後からとってつけた理屈はいろいろあるんですけども、実体は、日中正常化を期待する国民の大きな声に抗し切れなかった。その国民の声が正しいか正しくないか、日米安保をどう認識するか、そんなへ理屈は全然ない。これが、いいか悪いかは別として、田中角栄の政治家としての非常に特色のある面だったと思うんです。そういう政治家はそれ以後いなくなりましたね。

添谷 日中共同声明の中で日華平和条約に直接言及せずに、記者会見で大平外務大臣が、「存続の意義を失い」というような声明で処理しましたね。あれに関しては、台湾とは事前にお話はなされたんですか。

中江 それについては、台湾と話をする必要はないくらいに台湾は怒り狂っているわけです。だから、何といおうとだめだし、そんなものは交渉の対象にならないので、それは無視。田中内閣のやっていることは全部間違いだ、日本側が勝手にやっているということですね。

村田 ちょっと話がさかのぼって申しわけないんですが、中国の国連加盟のときにアルバニア提案が出て、日本は、負けるのがわかっている、最後まで台湾を応援するという形になりましたね。あのときに、佐藤政権として、例えば棄権という選択肢もあり得たと思うんですけども、そうせずに、負けるとわかっている、最後まで台湾を応援するというのは、さっき先生がおっしゃったように、台湾のメンツを最後まで立てることが一番大きな理由だったんでしょうか。

中江 そうでしょうね。あれは、佐藤栄作が最後は決断したんですけども、最後まで台湾のために1票を投ずることはしなきゃいかぬのじゃないかというのは、一種の義理人情みたいなものではないでしょうか。合理性を超えた一つの倫理観だった。それはそれでいいと思うんです。

添谷 平和友好条約の話に移らせていただきたいのですが、平和友好条約の焦点は、いうまでもなく覇権条項だったと思うのですが、日本が第三国条項と呼ばれるものとセットで受け入れるという決断をした時期は、いつになるのでしょうか。

中江 私の個人的な考え方ですけれども、日中平和友好条約の締結は、基本的に何も急ぐべきでなかったと思うんです。あんなものをなぜあのときに交渉することになったのか、私自身は今でもまだわからないんです。高島アジア局長も、当時、その点についてはよく知らされていなかったと思うんです。

航空協定交渉が行き詰まって、大平さんが74年の正月到北京に行かれて、血の小便が出るくらい悩まれたといわれている。航空協定の最後の基本的な詰めのところ、本当に大変な交渉だったんですね。そのときに、どういうわけか日本側から中国に対して、平和友好条約の締結交渉を始めましょうといっている。それは、そのことによってこっちを少し薄めようという感じがあったんじゃないかと思う。これは、大平さんも亡くなられたから、わからないんです。

添谷 それは大平大臣がご自身でおっしゃったんですか。

中江 もちろん口でいわれたのは大平さんですが、大平さんが自分でいったのか、大平さんにいわせたのか、それは僕はわからない。僕はそのとき非常に不信感を持ったんです。何であんなものを結びつける必要があるのか、日中平和友好条約は、日本からいうのじゃなくて、中国から「何とか結んでください」といってくるのを待っているのが一番いいと僕は思っていた。ところが、それをいっちゃって、しょうがないから交渉が始まった。

交渉が始まった翌年の正月だったか、ある日本の大臣経験者がワシントンに行って、それこそオフレコの記者懇談で、「日中平和友好条約の締結交渉が始まると、覇権反対条項が問題になるよ」と口を滑らせた。その年の2月に、それを日本のある新聞が特種でトップで報道したんです。それからみんな騒ぎ始めた。

添谷 あれは東京新聞でしたね。

中江 僕は、あれは日本の国益を大きく害した記事だというんです。新聞人としては、知った以上は報道せざるを得ないというのは理屈かもしれぬけれども、それによって日本はどれだけエネルギーを損失したかわからない。特に中ソ関係にもものすごくいい材料を与えた。中島実さんなんかは、あれがあるために日ソ関係は徹底的にだめになるというコメントをしたでしょう。日本は厄介な中ソ関係の中へ自分で身を置いて、両方からごちゃごちゃいわれて、その条項をどういうふうに乗るかというつまらぬ努力をしなきゃならな

くなった。

中国は反ソでいいかもしれないけれども、日ソ交渉があるのだから、日本は反ソではいかぬ。中国が反ソ条項だといっているものを反ソ条項でないようにガス抜きをするにはどうすればいいかというので、第三国何とか条項とか、いろんな知恵が出てきたわけですが、そんな余計な知恵を考えなければならぬような立場に日本を追い込んだのは、あの記事があったからだと思っているんです。

本来イシューでないものを一たんイシューにした以上は、解決しなければいけない。このイシューをどういうふうに取り捨てるかというので、それからいろんな交渉があって、宮澤四原則とか、いろいろな提案がありましたね。ああいうことを日本側は自分ばかりで考えて出すんですけども、相手の中国はそんなことを考えているどころじゃない。文革の嵐が吹いて、とても日本と条約交渉する雰囲気でないときに、何とか提案、何とか提案と出す。「喬冠華外交部長は返事もしない」と宮澤さんは怒ったりしたけれども、返事を要求する方が間違っていると思うんです。

日本は自分のことばかり考えて、相手のことは考えないで、外務大臣が知っているのに、返事をよこさない、けしからぬというのは、ひとりよがりもいいところだと思ったけれども、そういう時期があって、結局中国もやがてあの条約が必要になるわけですね。

何のために必要になるかという、ソ連圏の中からルーマニアが外れてくるんですよ。ユーゴほどじゃないけれども、ソ連圏の中からルーマニアが外れてくる。これを中国がつかまえて、ソ連圏にくさびを打ち込むために、華国鋒がルーマニアとユーゴを訪問することを考える。その華国鋒のルーマニア訪問のときに、華国鋒のカバンの中に、反ソ条項の日中平和友好条約を持っていきかけた。僕はそう読んでいたんです。

だから、中国はやる気になっている、恐らく中国からおりてくるに違いないと思ったんですけども、さっきもいったように、中国が知恵を出すので、日本から、これでおろ、あれでおろといっても、中国は「はい、わかりました。日本の妥協案はいですね。それでいきましょう」というわけにはいかない。最後の妥協案は、いつも中国がいい出したということによって自分のメンツを保つのが中国のやり方ですね。

よくいわれていますけれども、覇権反対条項の反ソというガスを抜くためにどういう条項を入れるかということについて、1、2、3、4だったか、A、B、C、Dだったか忘れましたが、日本に4つの提案があった。これは福田総理のころですが、最後はその4つの提案を持っていくけれども、一番望ましいのは第1案だというふうに御前会議で決めて

行くわけです。

園田直が行ったわけですが、黄華外交部長が、ガス抜きとはいわないけれども、第三国条項については中国側はこういう案でいきたいと思いますということで、中国の提案としていった。そのいった内容は、我が方の第1案だったんです。日本側で検討したところでは、せいぜい第4案でおりてくれればよいなと思っていたのが、ずっとおりて、1案でおりてきたんですね。

それはなぜであるか、多くの人が語っていないし、余りいわれていないことですが、それは、さっき私がいったように、華国鋒はルーマニアに行かなければならない。ソ連圏にくさびを打ち込むためには、反ソ条項の入った日中平和友好条約を日本と締結して、中国としてはソ連の覇権には反対だという立場を鮮明にしている、ソ連の覇権に対して抵抗するルーマニアの政策変更は、中国としては大歓迎であるということをいって、世界にソ連の覇権主義をプレアップしようという魂胆があった。

平和友好条約が締結されたのは8月12日ですが、華国鋒がルーマニアに出発するのは8月二十何日かで、それ以前にこの条約は締結されると僕は読んでいたんです。交渉の最終段階で、佐藤大使の公邸で中国側の関係者と晚餐会をやった。その晚餐会で、メインテーブルに座っていろいろ話をしているとき、「ところで、華国鋒が東ヨーロッパに行くという話があるけれども、いつごろ行くんですか」と聞いたら、向こうの外交部の人が、「8月二十何日かの出発で、それはもう決まっています」といったんです。それで、僕の個人的な判断ですが、それ以前にこの条約は絶対締結されると信じた。

心配することはない、必ず中国はおりてくる。おりる以上は、中国としては、日本を一番喜ばせるところでおりなきゃいかぬから、第1案でおりる、第1案でおりようが、第4案でおりようが、覇権に反対という条項が入りさえすれば中国としてはいい、だから、この条約はこれでまとまったなと実は思ったけれども、一生懸命交渉した結果まとまったというふうにしなきゃならぬ。それこそ、園田外務大臣とかそういう人たちのメンツもあって、難交渉を抜けてきたのは、園田外務大臣が頑張ったからということになっている。

日中平和友好条約1つをとっても、日本で考えている反ソ条項をどうガス抜きするかという次元の問題でなくて、中国としては、グローバルな対ソ政策の1つにそれを利用しようとしているというところまで読み切った上で、だから、これは最後のタイミングで、中国はおりてくるだろうという見通しまで立てるように考えるべきだと僕は自分では思っていたけれども、福田さんにしろ、園田さんにしろ、佐藤大使にしろ、上に立っている人た



ちの話している次元は全く違う。だから、私がそのとき仮にそんなことをいっても、「おまえ、何いってるんだ」ということだったと思いますよ。

添谷 次元が違うとおっしゃいますが、どういうことですか。

中江 日本側は、福田総理以下、条文にこだわっているわけですよ。ガス抜きするためには、第三国に対するものではないとか、何とかを害するものではないとか、どれがいいだろう、あっちがいい、こっちがいい、そんな議論ばかりやっていたけれども、僕は「そんなのはどうでもいいんですよ。向こうはおりますよ」というわけにはいかなかった。条約局がやる条約交渉ではあっても、そこに政策的な判断が絶えず伴わなければだめだと私自身思いました。そういう意味では、非常におもしろい交渉だったと思います。火をつけたのは永野君だけれども、最後はまあまあのところへ行ったんじゃないですか。

添谷 永野さんがピックアップしたオフレコ発言は、どなたか、お名前はまずいですか。

中江 これは死んでもいけません。(笑)

村田 園田さんは、週刊誌か何かの回顧で、自分がブレジンスキーに頼んで、アメリカサイドから福田さんに圧力をかけてもらって、日中平和友好条約の締結を早めたといっていますけれども、そういう印象はお持ちですか。

中江 全然知りません。もうすぐ園田さんの十三回忌があって、僕も出ますし、一緒にいろんな仕事をした大臣ですから、とやかくいいたくないんですけれども、あの人の話はおもしろいですよ。それだけのこと。鄧小平の前でたんを吐いたとか、尖閣諸島の話で鄧小平が「いおうとしたから、待ってください、その話は何とかと聞いたとか、あの辺も実に上手に書いてあるけれども、おもしろいだけです。」

村田 この件に関しては、園田がブレジンスキーに頼んだという話だけではなくて、アメリカ側からのプレッシャーみたいなものはお感じになりましたか。

中江 そういうことがよくいわれるんですけれども、僕は全然知らないし、そんなことはなかったんじゃないかと思うんですよ。政治家は政治目的で話をしますから、自分の手柄にしたり、いろんな思惑で話をするので、大体政治家の話は僕は信じないんですよ。政治家には政治家の世界があるから、粉飾しても、修飾しても、何でもいから、お好きなようにお話してください、僕は僕で事務的に筋の通ったことしか信じない。私自身の筋の中には、それは全然入ってこないんです。だから、どうだったか知りません。

添谷 ブレジンスキーが77年5月に訪中して、そこから米中の国交正常化に向かっていったというのが一応定説になっていますけれども、その帰りに日本に寄った。ブレジンスキ

一は回顧録の中で、日本に対して平和友好条約を急げと説得した、あたかもそれが効いて、日本が動いたかのような書き方をして、アメリカにはそういうストーリーを信じている人が実は専門家にも多いんです。

ただ、緒方先生がお書きになった本で、日本が覇権条項への態度を決定するのは、基本的にブレジンスキー訪中の前で、それを受け入れる形で友好条約締結に臨むという方針はその前から決まっていた、アメリカの影響はそれほどなかった、日本においてもアメリカのプレッシャーが議論の対象になった兆候はないとおっしゃっているのですが、そのとおりですか。

中江 そのとおりですね。台湾擁護派の福田派の領袖である福田総理が日中平和友好条約に踏み切る、その結びつきが非常に難しいから、その間に園田外務大臣を介在させて、園田があれしたんだというふうに園田さんは持っていきかけたわけですけども、私の印象では、福田さんは、就任した翌日から日中平和友好条約締結のための勉強を開始された。私は毎日のように世田谷のあの人の家に呼ばれて、年末ぎりぎりまで夜ずっと条約の勉強会を続けたことを覚えていますけれども、私はそのときに「福田さんはやる気だな」と思ったんです。

ところが、そこは政治家で、外向きには「いやいや、台湾問題があるから、なかなか容易じゃないよ」って、ずっと引っ張る。政治家のおっしゃることは、別な考慮でいろんなことを含んでいる。それをにわかには信じるのは、ちょっといかがなものかと思うんです。添谷 中江大使ご自身も、恐らく福田首相も、アメリカ、米中の正常化の動きはそれほど気にして見ていたわけではないということですね。

中江 ほとんど気にしなかった。日中正常化、米中正常化は世界の潮流なんですよ。こういうふうに中国がワーッと動いてくるという流れはあのときから出ていたわけですから、それを見抜く力さえあれば、よその国がどうであろうと、早晚そうなっていく、私自身もそういう感じでした。

添谷 先ほどちょっとおっしゃった尖閣諸島の問題ですが、これが突如として勃発して、これはどのように当時はお考えだったら、わかりませんか。

中江 いまだにわからぬ。あれは永久にミステリーじゃないか、中国の中でもよくわかっていないんじゃないかと思うんです。つまり、出先が先走ってそういう余計なことをしたのか、中央が指令してそうさせたのか、それとも、あり得ないと思うけれども、本当に漁船がワーッとあんなところに行ったのか、わからないですね。

中国の人は、わからないようにしておくという解決の仕方が割合上手なんです。ようわからぬけれども、結果として何も害がなければいいじゃないかというところがあるんですね。よく日本では「真相究明」と好んでいうんですけれども、真相究明するばかりが物のいい解決になるかという、必ずしもそうじゃない。あいまいもことしているままでほうっておけるような、ある意味でのずぼらなところは、日本人に一番欠けている。日本人は、真相究明して、隅の隅まできちとしたがる。いいことももちろんあるんでしょうけれども、それが災いすることもある。

あの尖閣諸島に漁船が200隻出てきたという話も全くわからないですね。聞けば、公式論で、あれは漁船が間違っただ、意図的にやったものじゃないという。仮にそうであったとしても、彼らは「意図的にやったんだ」なんて絶対いうはずがないですよ。そういうはずもないのに幾ら追及してもいわないでしょうから、追及する方が愚かだという感じもするんです。

添谷 尖閣の問題は、日本側ではどのように受けとめて、どのような対応をしようとしたんですか。

中江 あれは非常に邪魔っけだな、余計なことするなと思ったんです。出たというときには、中国は何を画策しているんだろう、何をねらっているんだろうと思ったんですけれども、2日目にさっと引いたでしょう。だから、これだけのことかと思ったんです。

中曽根さんなんかは、あのときは政調会長か幹事長をやっていたけれども、「中江君、これでこの条約はだめだよ」とおっしゃった。それが中国のねらいだったんでしょうね。つまり、中国というのは、交渉するときには、本当にやる気かどうかということいろいろ試すんです。これはどの交渉でもそうですよ。航空協定のときもそうだし、いろんなときにそういう例はたくさんある。とんでもないことをして、相手の顔色を見るわけです。相手は、真っ青になってあわてふためいたり、こんなものは大したことないと反応したりする。

尖閣諸島に漁船を出して、日本がどれくらい反応するか。日本が毅然たる態度をとれば、ヒューッと引いて、「やっぱりこいつはやる気なんだな」というので、話を続けていく。あれで、こんな中国は相手にならぬとかいって、日本が手を引いたら、日本は信用しないということで、中国の方から交渉のテーブルを離れることもあったかもしれませんね。僕は、あれは中国独特の揺さぶりの1つだったと思っているんです。

添谷 せっかくですので、福田ドクトリンのお話もぜひお伺いしたいと思うのですが、日本側から東南アジアに注目するというのは、ベトナムからアメリカが引いたことがかなり大きいだろうと思うのです。これも幾つかの観点からお聞きしたいのですが、1つは、アメリカという観点からお聞きしますと、福田ドクトリンを日本が準備するときに、アメリカとは余り相談もしていないし、アメリカも別に何もいってこなかった、日本が全く独自に準備したということですか。

中江 全く独自です。伏線として、田中東南アジア訪問で、ものすごい反日デモに出くわした。あの後遺症を清算して、日本の東南アジアに対する考え方を本当に考え直さなきゃいけないというので、日本側が東南アジア政策を根本から反省して考え直したというのが、福田ドクトリンが生まれてきた背景だと思うんです。

添谷 ベトナムを焦点に考えていらっしゃったと思うのですが、そのことに対して省内で反対はなかったですか。

中江 それは反対なかったですね。というのは、75年に南が北を併呑して、ベトナムが1つになった。ベトナムが統一されたのだから、インドシナ半島の冷戦の後遺症は終わった、そうすると、後に来るのは平和共存だ、自由主義ASEANと共産主義インドシナ3国との平和共存がこれから問題になると我々は思ったわけです。そのために、日本はどのようなスタンスで対応していくか、今までのように反共、冷戦思考ではだめだということで考え出したのが福田ドクトリン第3項です。

第1項は不信感をなくすために必要だし、第2項は、物と金ばかりいっていたのでは日本人は愛されないということで、その後でリー・クワンユーなんかがいい出したのはみんなあそこにあるんですけども、戦後の日本のアジア外交に少し心が足りないという反省があって、第3項は、ASEANにももちろん引き続き協力、援助を与えるけれども、インドシナ半島についてもこれからは応分の協力、援助を与えて、彼らが平和共存できるように手をかしていきたいというものです。

東南アジア政策全般について、今まで金もうけ、金もうけで、相手の経済建設に日本が深く入っていくことはよかったけれども、それだけにとどまって、そこからもうけを取るだけだったのが、田中歴訪のときの反日デモにつながったという反省があった。

だから、アメリカというのはなくて、むしろアメリカということでは、アメリカがベトナムから手を引いたそのバキュームに、中国やソ連みたいな厄介なやつが出てきて、あそ

こがひっかき回されるようなことになる前に、それこそE A E Cじゃないけれども、東南アジアは東南アジアでというきちんとした未来像を描ければという気持ちがあったんです。添谷 中国は別に何もいってきませんでしたか。

中江 全然ないです。中国はむしろ歓迎したんじゃないかな。僕もよく覚えていませんけれども。

添谷 国際的にも国内的にも大きな問題はなく、お考えのような形で実現した。

中江 ただ、その後がよくないんです。友田君の本にも書いていますけれども、ベトナムのカンボジア侵略があって、所期の目的は一頓挫し、思うようにいかなかった。しかし、結果的には思うようにいっていると僕は思うんです。

添谷 最近また復活しているということですね。

中江 あれの見べきところは、1項も2項も大事だけれども、第3項の平和共存の理念で、これは日中平和友好条約と似ているんです。日中平和友好条約は、冷戦構造下のアジアで、資本主義の日本と共産主義の中国が子々孫々の友好協力を誓う。これは、政治体制とかイデオロギーを超えた平和共存の理念です。それは、福田ドクトリンの中にある共産主義インドシナ半島と自由主義A S E A Nとの平和共存をねらうのと同じで、イデオロギーとか政治体制、社会体制などの相違にもかかわらず平和共存できる、この考え方は非常に大事で、今も本当はそのことをもっと考えなきゃいかぬのじゃないかと思うんです。

今はそうじゃなくて、欧米の価値観が正しくて、社会主義、共産主義の価値観は間違っているから、間違っているのが心改めるまでは制裁をしたりして、こちらの価値観に引っ張ってくるんだというのが見え見えになっていますね。けれども、それをいっていると、価値観のための争いがあり得る。価値観が違ってても平和共存できるという、もうひとつ高い立場で国家関係なり民族の関係を考える、我田引水ですけれども、その模範的なものが日中平和友好条約だと思います。

戦後の世界で、イデオロギーとか政治体制が違う国の間で平和友好条約を締結したのは、日本と中国しかないんですよ。それこそ冷戦後の世界新秩序を考えると一番模範になるのは、日中平和友好条約であり、福田ドクトリンでなきゃならぬ。つまり、体制の違いを超えて平和共存の道を求めることが一番大事な理念であるにもかかわらず、冷戦が終わったときには、あっちが正しくて、こっちが間違っている、こっちが勝って、あっちが負けたという単純な思考で、これからの世界はこっちの価値観が中心になるべきだと余りにも思い込むために、例えば基本的人権の問題もそうですが、余計なものが出てきているよ

うに思うんです。

結果的にどういう理念、価値観の世界になるかということはいろいろあるでしょうけれども、よくアジアの国がよくいうように、それまでのプロセスが違う、先進工業国が歩いてきたプロセスの最初の辺を我々は今歩いているのだから、最後のところだけで比べて、おまえは間違っている、おれが正しいといわれても、いただけませんという気持ちを日本は理解しなきゃいけない。

そういう意味で、日本はまだ冷戦構造の終わらない前に、共産主義の中国とも平和友好条約を締結できたし、共産主義インドシナ半島とASEANとの平和共存のために努力するという福田ドクトリンも出せた。そういうことの意義をもうちょっと考えてほしいなと私は思うんですけれども、余りだれも考えてくれない。(笑)

添谷 ただ、最近、まさに「福田ドクトリンの復活」という言い方を外務省の方もなさっていますね。

中江 そうですか。忘れないでくれればいいんですけれども。

添谷 福田ドクトリンのもともとのドラフトは、小和田さんなんかが中心にまとめられたものですか。

中江 小和田君は当時総理秘書官、亡くなった西山君がアジア局の地域政策課長で、西山、小和田は親友で、いい意味で客観的、冷静に物を考えて、いろいろ発想のできる。小和田君と西山君あたりがああとき一番働いたんじゃないですか。

添谷 外務省の考えとしては、最初から第3番目がねらっていたわけですね。

中江 そうなんです。

添谷 1番目と2番目は、福田首相の意向が強く入ったと考えてよろしいですか。

中江 1番目は福田さんの口ぐせでしたね。2番目は、「ハート・ツー・ハート・コンタクト(心と心の触れ合い)」なんていう英語があるのかと後で随分いわれたけれども、あれはどこから出てきたのかな。学者の中でも、経済の25%以上を1つの国に牛耳られると、その国に対する反感が出てくるということ进行分析した人がいましたけれども、なるほど、それはそうかもしれぬなと思って、心の問題があるのじゃないかということ議論したことを覚えています。一番のねらいは、ベトナム統一後のインドシナ政策をどうするかということだったんです。

添谷 この間友田先生にちょっと伺ったんですけれども、福田元総理に友田先生がインタビューなさったときに、福田ドクトリンというのを第3番目として理解なさっていなかつ

た、福田さん自身は心と心だと思っていたというようなことをちょっとおっしゃっていたんです。

中江 そうかもしれません。日本の総理とか大臣というのはそんなものですよ。

添谷 ちょっと話は前後しますが、73年9月に北ベトナムとの国交正常化をやりまして、三宅第一課長が随分お書きになっていますが、中江大使なりにそのプロセスの要点をご紹介いただけませんか。

中江 北ベトナムとの正常化については、僕の記憶の筋の中にほとんどないんですよ。当たり前前で、つまり、無理をしてとか、何かの抵抗に遭ったのを排除してとか、そういう印象がないんですね。アメリカが、M I Aの問題とかいろんなことで、ベトナム戦争後遺症に悩んでいることは知っていましたけれども、そのことが日本と北ベトナムとの関係正常化に何らかの影響を及ぼしているというふうには僕は受けとめなかったし、アメリカのことは余り気にしないたちだから、アメリカみたいな大きなグローバルパワーが自分でいろいろ考えているのに、日本に一々影響されると思う方が思い上がりだ、アメリカは別格だという感じでしたから、そういう目で見ると、北ベトナムと正常化するのは当然の道筋で、早くもない、遅くもない、なるべくしてなっていたという感じがしますね。

三宅君はまだ冷戦時代にやろうとしたわけで、北ベトナムに特使が行って、北ベトナムとの関係を正常化して、ベトナム戦争を上手に終わらせよう、それに日本も貢献しようという発想でしょう。僕はあのときアジア局の参事官をやっていたのかな、それが功を奏するかということで相談には乗っていましたがけれども、ニクソンになって、アメリカは撤退することに決まったわけだから、ほうっておいても、最後は南ベトナムではベトコンが勝利すると僕は思っていたんですけれども、不思議なことにベトコンが勝利しないで、結局ハノイが併呑したわけですね。やっぱり共産主義は強いなと思ったんです。

村田 ちょっと私の個人的な関心が多分に入っているのですけれども、77年に、在韓米軍を撤退するとカーター政権がいい出しますね。結局途中でやめてしまいますけれども、外務省のアジア局ではどういうふうにごらんになっていましたか。それはアメリカ局のことで、対象が韓国でも、アジア局は中心になってお話はなさいませんでしたか。

中江 記憶ないですね。北東アジア課あたりは一生懸命やったかもしれませんが、当時アジア局長だったんですけれども、日中条約が大きな 이슈だったし、在韓米軍の撤退なんということで余り神経を使った記憶がないですね。

村田 在韓米軍撤退の 이슈が日中の平和友好条約の話し合いに影響を与えたりしたことも全くないわけですね。

中江 全く関係ないですね。残念ながら、私の中の日中関係の7年間の間には、アメリカの影響はないんですよ。ほかのところでは影響を受けて、ごちゃごちゃいった人はいるかもしれないけれども、私個人はそういう記憶がないんです。

添谷 当然のことをお聞きしますけれども、75年のフォード大統領の「太平洋ドクトリン」などと呼ばれるホノルルでの声明なども、余り考慮したというご記憶はないですね。

中江 何とかドクトリンといって、あそころいろんなドクトリンがありましたね。(笑)僕は戦中派のせいか、ああいうストラテジックな、特に軍事戦略的な発想は、まず拒絶反応なんです。そういう発想が嫌なんです。戦争には飽き飽きしていますし、力で何とかしていこうという発想には非常に抵抗を感じる。そんなものに抵抗を感じていたら、外交はできないよといわれたら、それまでだけれども、今から反省すると、できるだけそういうものには自分から入っていかないようにしようということをも本能的に思っていたように思いますね。それはパワーゲームを楽しんでいる人にやらせておけばいいので、日本はそんなものに巻き込まれる必要はない。今岡崎君がやっているような発想にはなかなかついていけない。

添谷 最後に、このプロジェクトには全く関係ないのですが、最近のいわゆる中国脅威論についてはどう思われますか。

中江 僕は全く間違っていると思うんです。あれは、一口でいえば、ためにする脅威論で、中国が脅威でなければ困る国があるんでしょうね。中国を脅威だとすることによって何かをしようと思っている国が、そういうことをいっていると思うんです。日本が中国を脅威にすることによって何かを得るかということ、本当は得ないはずなのに、あたかも得るかのごとき議論をする人がいるのは、私にはよくわからない。何が脅威か、よくわからないんですね。

添谷 例えば南沙諸島のごときはよくいいますね。

中江 どこの国だって、自分の領土を守るために、軍事力を蓄えて、そこでデモンストレーションをやるのは当たり前のことだと思うんです。例えば中国が九州を乗っ取るために、九州の周りに軍艦を派遣した、これはやっぱり脅威ですよ。けれども、紛争の対象かもし



れないけれども、中国が自分の領土だといっているところに軍備を蓄える。日本だって、竹島だって、尖閣諸島だって、北方領土だって、自分の領土を守るために軍備を持っているのが普通の国だとすれば、それはあるわけです。普通の国ならやることをただやっているだけなのをつかまえて、「脅威だ」というのは、ためにする議論があるのじゃないかと僕は思うんです。

特に核兵器を持ったら脅威だということも間違いで、アメリカだって核兵器を持っているけれども、アメリカは日本の脅威かというと、脅威じゃない。軍事力が強くなる、核兵器を持っている、だから脅威だというのは短絡であって、軍事力を持ち、核兵器を持ち、プラス日本を敵視しているときに、それが脅威になる。日本を敵視しているかどうか、脅威であるかどうかの第一の条件だと思うんですけれども、今世界で日本を敵視している国がどこにあるかという、少なからざる人は北朝鮮だということなんですけれども、これも僕は間違っていると思うんです。

添谷・村田 どうもありがとうございました。